

村の村長・中山脩三と名乗り、わざわざ広島まで訪ねてきたのだ。聞けば官報で惟芳が合格したことを知り、村で唯一の年老いた医者の後任として来てほしいという依頼のための訪問だった。

年老いた母が住む生まれ故郷の萩で開業しようと考えていた惟芳に動揺が走った。しかし濃厚篤実な村長の人柄と、その熱意を込めた誘いの言葉を意気に感じた惟芳は、「最低五年間は村の医療に携わる」という村長の要望を受諾した。萩の中心部で開業すれば医者としてもっと多くを望めたかもしれないが、そのような考えは惟芳には微塵もなかったようだ。

宇田郷村元浦にある診療所に腰を据えると、人口約二千人の村医としての活動が始まる。険しい山坂が多い土地柄のため、往診には苦勞が絶えず、特に冬場はシベリアから吹き寄せる猛烈な寒波に難渋したという。

一方、村に住む貧しい農漁民が治療費の支払いに困った時には、決して無理に取り立てるようなことはなかった。むしろ医者に一度も掛からずに亡くなる村人が多いことに気づいた惟芳

は、住診料を取らないことを決めている。村民の健康に心を尽くそうとした表れであろう。

結局、五年という約束を遙かに通り越して、惟芳は三十五年にわたり村の医療に身を捧げたわけだが、その間私用で休んだことは皆無に等しい。ただ一度、皇紀二千六百（昭和十五年）年に伊勢神宮参拜のため四日間の休暇を願い出ているが、それ以外には益暮れ正月もなく患者のもとに駆けつけ、時間さえあれば医学雑誌を通じて新しい知識を身につけることに余念がなかったという。

我が身を顧みることなく、村医として人助けに奔走した惟芳が突然倒れたのは、隔離病棟での勤務中だった。そして三日間の昏睡状態を経て、そのまま帰らぬ人となった。

惟芳を乗せた大八車が、焼き場のある隣町へ運ばれていく時のことだった。誰と示し合わせるわけでもなく家を出た村民たちが、通り過ぎる大八車に向かって手を合わせる姿があちこちにあった。そして村境に至る約四\*もの道のりを、最後の別れを惜しむ多くの人々が見送っていったという。

惟芳は生前、「親しき者の死に直面して初めて本当の医者になる」と口にしていて、先妻と次男を病で相次いで亡くした深い悲しみこそが、惟芳をして村民に心から愛される存在へと育てたのではないだろうか。

家庭や仕事に対して厳しい一面もあったようだが、患者にはどこまでも優しくかつた惟芳。その公正無私な心で歩み続けた医療の道を辿ると、そこには「医は仁術なり」という言葉がくつきりと浮かび上がってくる。なお、惟芳の死後一か月して軍医だった長男が硫黄島で玉砕したという公報が届いた。父子ともに医の道に殉じたと言えよう。（やまもと・たかお 元高校教員）

### 人々に幸せに満ちた 穏やかな死を

萬田緑平

いまや二人に一人ががんになり、その半数以上が完治する見込みもなく終末期を迎える時代となりました。しかし、手術から抗がん剤治療、危篤時の延命治療に至るまで、あらゆる手段を駆使してがんを治そうとする医師が多にいる一方で、治る見

込みのなくなった患者さんの心を支援する態勢、医師はとも少ないのが現状です。

そのような現状を変えようと、私が外科医を辞め、群馬県高崎市にある「緩和ケア診療所・いっぽ」の在宅緩和ケア医となったのは二〇〇八年、四十五歳の時でした。聞き慣れない職業かもしれないが、簡単に私の仕事を説明するならば、終末期を迎えた方々が、最小限の医療処置によって、自宅で大切な人とともに最期の瞬間まで目いっぱい生き抜くお手伝いをする、ことだと言えましょう。

そうお答えすると、「退院したら苦痛が増すのでは？」などの疑問の声が聞かれます。しかし、ほとんどの場合、身心を痛めつけていたのは病気ではなく、過剰に投与された薬剤や延命処置なのであって、病院での治療をやめることで、残された最期の時を穏やかに自分らしく生き抜くことができるのです。

事実、私がこれまで直面してきた看取りのどの場面も、本当に穏やかそのものでした。亡くなる十五分前に訪問入浴を申し、「極楽、極楽」と笑っていたおばあちゃん。「あなたの愛する



家族一同より」と、家族から亡くなる前日に感謝状をもらったお父さん……。「いっぽ」の看取りの現場は、たくさんの思い出話や来世での約束など、ドラマの最終回よりもずっと真実な家族愛と歴史に縁取られているのです。きっとこのあり方が、将来の終末医療の常識になるはずだと私は確信しています。

とはいえ、かくいう私も外科医として勤め始めた頃には、あらゆる手段を駆使して患者さんの病気を治そうとする医師の一人でした。呼吸が苦しくなれば口からチューブを、食事がとれなくなれば胃に穴をあけ栄養を流し込む胃ろうを、心臓が止まりそうになれば強心剤をという具合に。ただ最新の医療を施しているはずなのに、ほとんどの患者さんが体中をチューブで繋がれ、何をされているかも分からない譫妄状態のまま、苦しうに息を引き取っていくのです。

# 花はただ咲く

2015年3月10日(火)～6月7日(日)



「ただ」1980年代後半制作

## ただ

—相田みつをが求めた世界—

開館時間 10:00～17:30(入館は17:00まで)

休館日 月曜(祝・祭日の場合は開館)

※5月4日は開館

入館料 一般・大学生800円/中・高校生500円/  
小学生200円(未就学児は無料)/70歳  
以上の方は500円  
団体割引あり  
障害のある方及び付き添いの方は無料  
(手帳のご提示をお願いしております)  
※ミュージアムショップは入場無料  
※作品には全て英語訳がついています。

### 第2ホール特別催事

公益財団法人仏教伝道協会 設立50周年記念事業  
東日本大震災復興支援写真展

「ブッダのことばとインドの風景  
～今を生き抜くために～」

3月10日(火)～3月29日(日) 入場無料

待望の日めくり  
「トイレ用日めくりひとりしずかII」



1080円(税込)

サイズ(210×200mm)

※通販及びミュージアムショップで取り扱っております。

通信販売でのお求めは

0120-312320

http://www.mitsuo.co.jp

相田みつを美術館

東京都千代田区丸の内3-5-1 東京国際フォーラム 地下1階

TEL 03-6212-3200 ○JR有楽町駅 徒歩3分

そして、私はそのような現場に立ち会って行く中で、人間にとつての「幸せな死」とは何かと考えるようになり、患者さんに自分の意思で最後まで生き抜いてもらい、ご家族にも満足してもらえることこそ、人間の尊厳を守る終末医療のあり方ではないかと模索し始めたのです。

医師になつて二年目。患者さんを受け持てるようになった私は、当時一般的ではなかった余命の「告知」を行い、患者さんと家族の意思を尊重した治療のあり方を少しずつ実践していきましました。効率よく手術や処置をこなす同僚からは、「病室で患者と話してばかりで仕事が遅い」などとばかにされることもしばしば。しかし、私が初めて告知

を行つた患者である小林和恵さんとの出逢いが、私の心の強い支えとなつてくれたのでした。彼女は三十九歳と若く、二人のお子さんの母さんでもあり、ピアノ教師として生き生きと働いている方でした。しかし、体調不良を訴え、診察に訪れた時には、すでに末期のがんに侵され手淫れの状態だったのでした。私は家族の希望を支援し、余命を告知。後に抗がん剤治療から自宅療養に切り替えた彼女の

後、帰りの車中でそつと目を閉じた彼女は、そのまま深い眠りに落ち、翌々日に自宅で静かに息を引き取つたのでした。生前、「自分の家で、自分のピアノの前で、シヨパンを聴きなから家族に囲まれ、眠るように逝きたい」と言っていました。そのとおりの穏やかな最期でした。そして、悲しみに暮れる私に、小笠原先生はこうおっしゃつてくださったのです。「和恵さんは、人生の最終楽章を、自分で『書いたんだ』と。」

この時の体験が私に大きな影響を与え、手術に熟練したかっこいい外科医を目指す傍ら、緩和ケア研究会や小笠原先生の講演会に顔を出すようになり、四十五歳の区切りをもって、在宅医